

あいるべし兄の嫁もいるべし、ワイ、オジ（弟）の嫁だして、娘どもエのほれ、おき娘どもいるべしみなご飯どあワイド全然やったごたあね。とにかぐソドですごど（仕事）すだけ。イヅになるまでは（笑）。アサマ起きれば田んぼさ行ってハダゲさ行って、それだけ。」

β氏は、最花で生まれ育ったが、同地では魚はほとんど食べなかったという。たまにバケツに入れて売りに来ると、三平皿を持って買いに行った。（2015年9月24日取材）

㉗ むつ市田名部土手内 γ氏 昭和15年生まれ 女性

居住の経緯・燃料・用具・その他

γ氏は土手内で生まれ育ったが、「家庭がいい家庭だったと思う。ワイだちはなも恵まれであって」というように、サルケとは無縁の生活であった。生家でも、昭和36年に嫁いだ先でも、使っていなかったという。家では薪ストーブを使用していた。「いやあ、ワイは（サルケのことは）全然わがねえ。ウヂでサルケだなんて焚いだ時ないして。見だキオグもね。ワイは。マギ。マギストーブでった。」

㉘ むつ市田名部土手内 δ氏 昭和18年生まれ 女性

居住の経緯・呼称・時代・乾燥・燃料・臭気・その他

δ氏は、東通村から昭和41年に嫁いだ。出身地では薪を使用していた。また、嫁ぎ先の土手内でも、嫁いだ当時は薪を使用していた。炊飯は薪ストーブに小さなツバガマを載せておこなった。その後、ガス釜を使用するようになった。「掘ったのはわがねまだよぐワ（私）ヒガシ（東通）だんだけども大曲のほどサルケ掘ってこう、互い違いに乾がしてるの見だごどあるんだいの。大曲に分家あったごどで。ニオイはする。ちっちゃいどぎまず小学校の頃だな。使ったことはない。（東通は）マギ。（嫁いだときは土手内もマギだった。）ご飯炊ぐのは、ガスガマでねしたが。むがしな。電気釜でねぐ。マギストーブでも焚いだな。ツバガマだが。ちゃっこのでな。」

δ氏は、ガス釜を昭和60年ころまで使用した。その後、電気釜を使用するようになったが、「ガス釜のほうがおいしい」という。昔は反収3俵程度だったというが、カデメシは食べたことがないという。

㉙ むつ市田名部土手内 ε氏 昭和3年生まれ 女性

居住の経緯 ε氏は東通村で生まれ、小学校卒業のころ、田名部へ移った。その後、昭和25年に土手内に嫁いだ。

呼称 「サルケ」と称した。

年代・普及 ε氏が小さいころ、それほど多くの家では使用していなかったという。「そんなに、ワダシらちせどぎでも、そんなに何軒も使ってなごったよ。私も東にうまいで〇〇町（市街地の通称名）に分家になって、〇〇町がらこれ、ごごさ出できたもんだがら。〇〇町にハア、ちいせころ、学校そびぎょうしないうちにきて、それがらごごに。」また、ε氏がサルケを使用したのは、限定的であった（「使用法」の項を参照）。隣家の××家が使用していたことによる。「（サルケを隣家では）使ってました。ウヂの隣の人が××さんて、その人が使ってます。田んぼも隣で、ツヂも隣だがらさ。」

採取一時期・場所 田から採取した。

採取の目的 ε氏によると、「上の土は黒土だがら、黒くないど何でも田つぐるあの稲ど作られないがら」というように、田地の改良が第一の目的であった。

採取法 表土（黒土）を寄せておき、「2番目か3番目か」はつきりしないが、タヂで印をつけてから、何段か下の層からサルケを掘り採ったのだという。「掘ってるのは、こして切るのばなんたたきや。タヂでこして。ちょんどよぐカダヂ付けで、上の土をそれ取っておいで、そしてほれ、2番目、3番目ぐらいがら（サルケを）採るんだが、それで出で来るのまだ。土が取った、2番目だが3番目だがはつきりわがんないけどもさ、上の土は黒土だがら、黒くないど何でも田つぐるあの稲ど作られないがら。そしてちょんど幅このぐらいのカタこついで印つけでタヂでこして印つけで（サルケを）採ってこう互い違いに。2番目だが3番目だがはつきりわがねけども、最初は黒土こう、寄せで。」

乾燥・運搬・保管 掘り採ったサルケは、互い違い（十字型）に風が通るように隙間を空け、「転ばね程度」の高さに、円形か四角形に積んだ。どちらの形に積んでいたかは、記憶が定かではない。「掘ってこしての。積むにこして、干すためにこして、こして、互い違いに、そして干してました。こすれば風が入るがらって。崩れないようにしてこう丸ぐだがシカグだがさそれまで気あつかながったけども、転ばないように。」

使用法 ε氏は、□□家と隣であったため、田植えの際に、暖を採るために焚いていたサルケにあたらせてもらった。自身の家で使用することはなかった。「ありますよ。田んぼで。寒いどぎが、アレだのむがしだったらアレ、あのなんてへるクツもないシテブクロもないし、そしてあのカラアシで入るトギは、手植えするどぎアレ、隣の人がアレ、

隣の人呼ばれでってあだってくるの。□□さんがすぐ隣だもの。へばすんごぐホカホカっての。ほでって燃えるのまだ。あつたがいの。」「私のウチはそういうの燃さない。隣の人がそして、田んぼが隣だばウチも隣で、×××。」「田んぼで寒いとき。田んぼさ積んで、小屋さ入れで乾燥してまれば、それこたはあ、むがしナガツもないどぎに、テブグロもないどぎ、寒くて寒くて手こう、田植えるときに、アレだの、イップグだの何だのそのどぎ、イップグば、コビリコビリって昼ど朝にあいだ休憩時間、コビリになったり、こんだ立ってれば寒いもの。座ってれば。へば隣の火こさ呼ばれでさ。手あぶたどぎあつたなあ。うん、すんごぐあのホコホコってあつたがいみたい。』

また、ε氏自身の経験ではないが、採暖のために焚いている火で、ジャガイモを焼いて食べたという話を聞いたという。「いやあ、その火にだば、アレだの。あだめだことはないけども、その火でジャガイモ焼いで食う人もあるんだってそういう話は聞いたことあるよ。下のほうホカホカってるがらさ、へばほれ、じゃがいも下さいれでおげばジャガイモが焼けるってそういうのだば聞いたごとはある。私は全然やらないけども。まあ、何てばいいんだがあたかいは×××。』

ε氏は、サルケを家で使用しなかった理由として、「南部衆だから」と説明している。「たどえばウチでは、南部衆だから、サルケ焚がなくても、マギあるがら、マギ焚いで、ウチの嫁に来たどごのおじいさんの実家（X村）が、マギあるウチで、そしてそごがら持ってきて買ってきたりなんかして。』

煙・臭気・灰 独特のニオイは、サルケの代名詞であった。土手内に嫁いだε氏は、実家に帰省すると「サルケくせ」とからかわれた。ε氏の家ではサルケを焚いておらず、従って実際にニオイがしたわけではなかったの、冗談半分のからかいであったし、ε氏もそれが冗談であることは理解していた。しかし、「ばがにされだみたい」な気持ちになったとも語る。「ニオイ付きますよ。その着物にニオイが付いでさ。へてこだX村の人が、あのワダシほれ、こごへ嫁がへだの聞いて、そして、覚えだ人が、X村カネモヂあるもんだごつたい、いやあ、オメど隣さ来たきや、サルケくせって冗談に。そう言われだづぎあつたな。はやいどごば、バガにされだみたいにしてさ。ほでや、ウチでだっきゃサルケ焚いでねえって。そうして。X村の人だらまだカネモヂばしあつたね。へばワダシの実家もほれ、X村けども旦那の実家もみな先祖はX村だの。そしたごら、X村のほも詳しく覚えでるけども、津軽のほはワはつきりわがねの。ともかくサルケは燃えるもんだよ。すごぐ燃えるもんだ。」「やっぱニオイはするの。それ着るのにニオイが付ぐって。言わいだどぎあつたの。ワダシは冗談にさ、あのほれ、一緒になったづぎ、X村の人覚えだ親戚の人が、サルケ燃したどごさ嫁いだづもの、サルケのニオイするなって、こうして、冗談に言われだごど、ウチでは燃してながつた。』（2015年9月24日取材）



土手内地区

⑩ むつ市田名部土手内 と氏 昭和11年生まれ 女性

呼称・年代・採取の主体・使用目的・灰

と氏は、X村××集落の出身で、昭和31年に土手内に嫁いだ。自身は使ったことはないが、サルケの採取を手伝ったという。表面のよい土を寄せ、サルケを採取した。燃料として用いるためではなかったの、採ったものは捨てたという。赤土で押さえるように客土したという。「焚いだのは見ないけど、掘ったのは見だ。掘っててづだいた。村林のあつこの田あつたんだもの。向町の村林で。へってわいがてづだいたさ行つたんだもの。サルケがたまれば、あれ草がな、根がな。それがたまればふぐえるつきや。ツチがふぐえるべ。そごこんだ掘って、いいツチばよせでサルケ採って。ジョンズに採ってな。なもそのづぎはの。燃やさながつたがら。たんだ採ってなげで。そごだけこう、ふぐえでくるがら、水かがねがら困るでしよ。』

採取の方法 「キッカゲ」と呼ばれる、田と田の段差の法面の部分を調整するものや、刃と柄の角度がゆるやかな踏鋤のようなものや、「ツグス」「ツクス」「ツギス」「ツグスギ」などと呼ばれる平鋤のようなもので採取した。

(2015年9月24日取材)

⑪ むつ市田名部上川 η氏 昭和11年生まれ 女性

η氏は土手内の住民ではない。しかし、姉が土手内に住んでおり、古くから土手内の住民らと親しく交流してきた。

呼称・採取場所・乾燥法・用途・その他

η氏は土手内近隣の集落に住むが、V氏との縁で、毎回土手内の地蔵講に参加している。姉が土手内に住んでいたことから、土手内との往来のなかで何度も目にした。サルケは田から採取され、レンガ状に互い違いに隙間をあけて積まれていた。炊飯や暖房に利用したと考えている。また、土手内の集落に近づくと、サルケのニオイがしたという。「何回も見だ。重ねていだつたし、燃やしてあの。ニオイするんだものコチャくれば。ワイだちの、姉さんドデウチにいだつたべ。姉さんどあ燃やさながつたけど。こうなって、富士山み

たいにさ。で、空気穴つぐって。こいうふうにレンガ積みみたいにこうなって。穴あいでね。それ何回もみだ。ここ
 でやってるんだもの。田んぼのアレのな、クロとって。田んぼのナガがら。んだんだよ。燃やしての。それでご飯食
 べたりしたんだしてねえ。暖房だべねえ。」(2015年9月24日取材)

㊸ むつ市田名部土手内 〇氏 昭和9年生まれ 男性

居住の経緯 〇氏の先祖は大正のころ、岩手県北の山形村から、開拓集落である「メナシンテイ」（目名新田）
 へと移り住み、その後土手内に移住した。移住は〇氏が生まれる以前のことである。

呼称 〇氏は、「サルケ」「シグボ」の二種類の名称を使い分けている。また、表層10cm程度のものを「シグボ」と
 いい、草の根が混じっているような状態のものだったという。その下にあるのが「サルケ」であると考えている。畑作
 にはシグボを起し、自然に分解したものを利用したという。「シグボづのがすぐながったの。だいたい、まあ10cm
 ぐれあればいうちだった。」「つち、シグボだんでねがな。サルケは別で。」「やあ（サルケとシグボは）違う。そ
 れごさサルケが下だわげ。」

年代・普及 サルケを利用したのは昭和29年頃にストーブを導入してからのことであるという。〇家では、それ以
 前は薪を使用していた。

分布・質 〇氏は、土手内から大曲までサルケが分布していると認識している。道路の整備にはセメントの注が
 必要だったという。「ここから、大曲ってどごまで、層だの。だがら今、こさドロ（道路）つぐってるべ、ここにも
 かなりかがったの。何回もやったけど、去年だがなあ、2メートルぐれの下へ切ってさ、セメント注入して、コン
 クリ持ってきたわげ。」

採取の時期・場所 〇氏は、田地の改良とともにサルケの採掘がおこなわれたと語っている。田は昭和10年ころから
 作っていたという。また、サルケの採取は「春4月が5月ごろ」だったという。

採取の目的 〇氏は、サルケの採取の目的には、田地の改良と燃料の獲得が
 あったと語る。田は、30cmくらい低くしたという。シグボやサルケのためにぬ
 かるんだ田の排水溝を1メートルくらいの深さに掘ったともいう。また、薪に
 不自由していたことも、サルケを採取した目的のひとつであったと語る。「田
 んぼにすためにこのサルケがあつて、高くてほら、水がのんねどごあたたの。
 そんだもんだがら、大体、30cmぐれも、そして田んぼにしたんだ。いやほら、
 田んぼにすためによ、今は採草場であったの。それを田にするために、高いも
 んだがら、田んぼにするために掘ったの。そうしてその当時はほら、燃やす木
 もながったの。山ほら、遠いどごで、営林署って、民間の山だば自分の山でね
 ば切れねべ。営林署ってばだいぶ遠いんだ。ここは。だどごで木も不自由だし、
 まあ、田んぼさ行げばそういうのあたもんだがら、掘ってさ。乾燥させで。」「田
 んぼつぐねばあれだつごどで、田んぼつぐったがら、そごさただ草おがらが
 したどご、耕して田んぼにして、高いもんだがら、水かがねがら、やっぱりこ
 ういうふう掘ったの。」「ツチが悪いがら、シグボだ、サルケあるがら、ぬが
 るわけ。馬。だがらむがしはほら、下水も1メートルぐらい掘ってあつたの。」

〇氏によれば、サルケの上にはシグボが10cm程度あり、畑作に利用されたとい
 う。畑の畝を作る際には、左右からシグボを深さ10cm程度に1枚ずつトガで



図2 表層に10cmほどのシグボがある

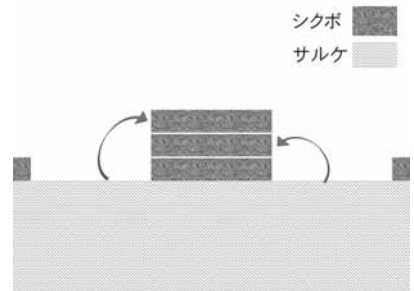


図3 両側からトガで起こして2枚重ねる

起こし、2枚を重ねた(図2,3)。それを翌年まで放置すると、草の根が腐って土のように変わっており、それをク
 ワでならして作物(小豆、ササゲなど)を植えたという。「こつがらも上げればこつがらも上げで。並べるの。」「次
 の年なれば草の根が腐ってくから、バサバサど崩れるの。(略)次の年になれば、草の根が死んでるんだ。チッソグ
 するみたいだんでねがな。」「濃いツチあるもんだがら、ものすごぐアレだんだ。ツチになってまんだ。かまされる
 と。繋がってるもの、離れで、こまごまになるがら、そふにツチみたいにまだ変わってぐわげさ。」

採取の方法 まず、タヂで切れ目を入れ、切れ目に沿って、トガで1尺2~3寸×1尺、厚さ1尺の正方形に切り取
 った。一列採ると、その並びに従って次を起こした。「ここ、きたぎるべ。そしてまだあの、きたぎってこう、干
 すわげ。これぐれにして。1尺2~3寸ぐらいがな。そのぐらいにしてくださいまだこち1尺ぐらいに、30cmぐらい
 にして、こいうトガつうもので、ガバつと起こしたの。(その前に切れ目を入れる)タヂ、こよう長いあつたの。一回
 起こせば、づばん決まってるがら、そのなりまだこようきたぎていれで起こすほづして、それを乾燥させで、燃やした。」「
 (サルケを自ら採取したことは)ある。これほら、田んぼがだいたい、こよう、シカグであるだろ、これさこよう、タ
 ジってこよう入れで、こようやって、それからサンボンカつてこいうので耕したの。今の機械ない前は。」

サルケ掘りに使用したトガは、田名部の鍛冶屋で作ってもらった。「むがしはほら、カジヤもやっぱりそいうの使

ったもんだがら、今みたいにそれごさ、そつこつがら入ってくるづのはながった。そごのマヂのうちの鍛冶屋さんが何でもつぐってあった。(土手内には) なかった。すぐアレ(田名部の町が近いので) だもの。町さ行った。」

乾燥・運搬・保管 正方形に採取したサルケを、厚さ5～6cm程度にスライスし、採取後2～3日でひっくり返した。4～5月頃から、採取した場所にそのまま置いておくと、6～7月頃にはすっかり乾燥していた。その間、何度かひっくり返して乾燥を促した。ある程度乾燥したのち、互い違いにレンガ積みをした。ブロックの両端のみを重ねるようにして、隙間を作った。円形に積み、中央は空洞にした。高さは1メートル程度だった。上にはムシロやワラを被せた。柔らかいものが、乾燥すると固まって壊れない状態になった。「採った場所さ、春4月が5月ごろあれすもんだがら、結構乾燥の温度のある時だがら、乾ぐんだ。2ヶ月も暮らせば、カラカラになる。うん。絞れば水出るんだ、下がら採るもんだがら。(中略) そごさ置いてさ、手入れすわけ。ちょっと乾いだなど思えばひっくりがえして。アレになったら、ある程度になったら、こんだ積むわけ。それごさ、やわいとぎだば豆腐みたいだもんだつたどごで、乾燥してまればながながアレだんだ。壊れねの。草の根だんだ。いわゆる。その当時だば、なんだつていつてあつたばて、今忘れてまった。」「こう、円ぐつぐるわけ。互い違いにちょっと並べて次まだアレすどぎはこのジョイントさかぶせるわけ。まるぐこうつぐって、干したの。まるぐこう積んで。真ん中は空洞になる。高さはだいたい、1メートルちょっとぐらいがな。当時はほら、えまのビニールシートみたいなのがつたの。だがら、ムシロがワラで作つたの。そういうの被せで。」

使用法 燃料として利用するときには、タヂで2寸程度に切って用いた。「燃やすのはな、採つてアレしたの、大体まあ、2寸かそのぐれに切るわけよ。いまのそれごさよぐすみたいにアレだがら。おっきいこれぐれのタヂづのあるの。これこやつて切れるわけよ。」

θ家では、6尺くらいの炉を囲んでいた時代には、サルケではなく木山から採ってきた薪を燃料としていた。θ氏が20歳のころ、つまり昭和29年頃になると、薪ストーブが用いられるようになり、その頃から燃料としてサルケを使うようになった。「エで(燃やした)。ストーブ入れで。結構あつたがいんだけども、開げだ瞬間に灰がつらばつて騒動だんだ(笑)。今のあだりめの煙突つだストフで。炉つて、6尺ぐれのアレで火も燃やして、あだつて。こうサルケ燃やす、あだりになつたらストフつのが出はつたがら、ストフで燃やしたの。もどは焚き火燃やして、エのなが真っ黒ぐなつたの。20歳ぐらいになつてがらだべなあ。ストフが入つて来たの。前はただストフでねがつたの。焚き火。3尺つて木山がら切たぎたの、それ燃やして。」

以前は、炉で鍋を用いて炊飯をしていた。その後、「普通の、いまマジ燃やしてるストフ」で炊飯をするようになったという。その燃料はサルケであった。「むがしの当時はほれ、電気のアレはながつたがら、けつきよぐみな鍋とがでご飯炊ぐ。ストフない前は、カギズギつて、そうしてむがしはこういうふうにくこう組んだもの(火棚のことか)を吊るしてそれさほら作業しきて濡れだりなしたりすれば全部それさ掛けで、へてその当時はえまみたいにナガクツつてねがつたの。みなワラで作つたツマゴ、ワラジ、そいのを掛ける。そさ掛けで干したもんだ。」

また、田から掘り出される埋没樹木を燃料とした。田起こしにバッコウを用いたが、埋没樹木に引っかかつて壊れてしまうことを防ぐための工夫として、バッコウの先に縄を取り付け、樹木に引っかかると切れるようにした。埋没している木は60cmほどもある木の根が多く、水を吸つて重かつたという。そのため、完全に掘り起こすこともできず、田から半分ほど引き出して1週間ほど乾燥させたのち、ノコで切って燃料とした。「田んぼアレしたらこんな木、下がら。むがしはほら、ほとんどウマだつたの。ウマに、バッコウかげで耕して、あれして、田んぼ作つて。」「ほれ(田から出てきた木)こた、燃やしたんだ。それ、木がいるがらこた、あの、バッコウのサギのどごさこた、弱いものつて、ワラナワだつたべがなあ。ブツつど当だればバツと切れるのな。しかげして。それねば機械なも壊したの。バッコウづの。あれほらバッコウづのはサギさ木のアレさこたスコブみたいだのがつてるわけ。それでガバガバどこう起ごしたの。ウマで。そうしねえと、壊してまるわけ。」「こつたら根っこばり出はつたんだ。60cmぐらいもあつたな。」「だがら何十年も何百年も入つてるもんだがら、石みてえなの。重ぐな。水あ吸つて。だがら今みたいに機械ねえどごでようやぐ半分ぐれ起ごしてさ、こうやつて一週間ぐれもおげばこた、春の乾燥地だがら、どつと水分がなぐなべ。そうせばこた行つてきたぎて。今みてに切るたてチエンソーてのねがつたんだ。手のノコでねば。」

煙・臭気・灰 焚き火のようなニオイがしたと記憶している。家の中はまるで黒いペンキを塗つたように煤けていた。また、灰は肥料に活用したのではないかと考えている。「ニオイはやっぱりするもの。なんてすがなあ。ニオイのあれも何十年もなるがら忘れてしまつたけれども、やっぱり焚き火だのそういう当時やつたあだりあニオイしたつた。エのながはあ、なも焚き火の時代は、いまそれごさ黒いペンキ塗つたみたいにガツパリはあ、掛かがつて。」「むがしはあまりほら、肥料とがなにもねがつたがら、(サルケの灰は)そういうのにも活用したんでねが。」

その他 堰をせきとめる材料としてもサルケを使用した。湿気があり、重みがあり、「ピッタリ」するために、ちょうど良いのだという。2つか3つを並べ、その上に板をあげた。自然の素材であるため1年しか持たなかつた。昭和30年頃にマンタイブクロが使われるようになってからは、サルケは用いられなくなつた。「堰をせきとめるための、

アレにも（サルケを）使ったの。堰をせきとめで、その水を溜めで、田んぼにまわすのに。結構湿気のあどほら、採たもんだがら、ピッタリして重みがあるして、いんだよ。それからずーっとアレになったらあ、30年あたり、だなあ、35年ぐらいがなあ。「マントイ」ってふぐろ。マントイグロってドガダでよく使ったの。それをこだ田んぼのアレさ、土アレして詰めで。へば何年も持つわけ。サルケはなも1年で終わり。まずそういうアレもねがったがら、そういうアレでやったの。ちよんどいいもんだがら、ちよんど適当に、田んぼさ合わへでおっきいアレだばまんだ2つ並べとが、の。3つ並べとが並べで、へてその上さほら、イダでも何がこうあげで、おもひかげで。」

その堰には、ドジョウがいた。ドジョウは土の中に隠れていた。堰がコンクリート製になってからは、ドジョウを見かけなくなった。「セギには結構だったの。ドジョウつのはやっぱりツヂのナガさ入ってるの。のう。それやわいツヂのとごにばりいるの。けっきょく、今みたいにハア、コンクリの水流れるアレがでぎだらドジョウもいなぐなったの。ツヂがないがら、自分がかぐれるどごないがらなあ（笑）。」

秋田方面から来た人が、窯で炭焼きをしたことがあった。「そしてどごから来たたべなあ。アギダのほうからだたべがな。それを窯つぐって、あの、燃やすアレにつぐったのあたたの。そこからちょっと、ここはほら、今は団地になってるけども、山でどつとアレしたったの。なんだが秋田だがどから来たなあどもつたつた。窯つくって。窯って、炭焼ぐのおべだべ。あいんだ釜つぐって、すっかりそれまではわがねけども、なに、そいにアレしたの。そして、干す……地盤が悪いもんだごごも、山のツヂを敷いで、やったみたいだの。何年もやねで1年もやったがな。とうとう、なくなつたね。炭みたいにつぐるための、アレあつたつたの。木燃やしたどもつたな。それさ、なんだべなあ。今のあの、窯で、アレ茶碗、茶碗でも、茶碗でもつぐべ、アレづんた、アレで、やったんでねがなあ。どもつていたもの。燃やす木をつぐるために、やったんだ。」（2015年9月24日取材、一部2016年1月30日確認）

③ むつ市田名部土手内 ㇿ氏 昭和22年生まれ 男性

入植の経緯・生い立ち ㇿ家は南部地方の出で、ㇿ氏が土手内に来たのは終戦後であった。この地域に早くから入植したのは津軽地方の大高、須藤、広田、小枝などの諸家で、なかでも大高家が古いという。「俺たちはㇿ（苗字）つうがら南部。この辺で津軽てばさ、大高、須藤、広田、小枝どがって南部のこちにない名字、あれが津軽。」「最初に来た人は、明治、廃藩置県なったあど、最初にいちばん来たのが大高つてのがこごでいちばん古い、それでも100年ちょっとなるがな。120年ぐらいになるのがな。いちばんの古いウヂ。」

呼称 「サルケ」と呼んだ

使用年代・普及の程度 ㇿ氏がサルケを実際に見たのは、小学校入学よりも前（昭和20年代）までであった。「まあ、学校へ上がる前だね。その頃までは、昭和22年生まれだがら、昭和30年頃はそういうのあまりながった、昭和20年代は、そういうウヂがあつたし、その辺は古いウヂはみな草屋根だつたがらな。」

分布・質 サルケとは、「草などが積み重なっているもの」とであるとㇿ氏は言う。「（サルケを燃やしたことは）あるある。俺も記憶あるけど、サルケつてこの辺田んぼさ、草どが何とがでもつてこう、ヨシがなんがの草がこう積み重なって、田んぼつぐる前みんなこの辺はそういうヨシとが草の積み重なって、そういうの採ねば田んぼでぎねがら、取って、干しておくば乾ぐがら、してもう、もども草だがら、火つけだら燃えるがらね。燃えるけども草燃やすだがら、煙出るよな。」

採取の時期・場所 薪について「べつにこれ邪魔だがらさ、ただで燃すのもなんだがらつていろいろち解体したジャッパなんがもあつてさ。ただ腐らがしておぐよりこして燃したほうがいいがなどもつて。むがしはこの辺みなマギけども、何十年がらストーブ、石炭燃した時期もあつたけども、おおむがしも、オレだち生まれる前はイロリさ草屋根どが、ウヂのほは終戦後だがら、草屋根ながつたけども戦前のうぢだこれも草屋根だつたんだよな。」

採取の目的 「分布・質」の項で述べたとおり、「そういうの（サルケ）採ねば田んぼでぎねがら」つまり、田を作るためにはサルケを採らないといけないという事情があつたという。

採取の方法・乾燥・運搬・保管 ㇿ氏は自らサルケを採取した経験はない。昭和29年頃に、畑を田にする際にサルケが掘り出されたと記憶している。切り出されたサルケが、家の前に積み重ねられている様子を覚えている。「俺はね。俺だちの子どもの頃は全部掘つたあどだもの。掘つたあどだがら、まあ、小学校のづぎは掘つてる人もあつたけども、俺だちものごごろついだ頃はそれもう掘つてるどごは掘つてしまつて田んぼにしてるがらさ。だがら昭和29年に、改良区、国の政策で田んぼ増産して、米増産するために、畑どあ、ひあ、そういうどご田んぼにした、事情があつたでしょ、昭和29年。それでその時に田んぼ、畑を田んぼにしたりして、その畑がら掘つたのがサルケとかそういうのがあつたりして。けっきょく昔は俺だち子どもの頃は、ウヂの前に積んでサルケこれくらいに切つてね、切つて積んでおいでかわがして乾がすのに積んでおいだどごがあつたけども。」

使用方法 終戦後に当地へ移住したが、その当時はサルケを用い、イロリで煮炊きをしていたという。ただし、「本当に煮炊きをする時には薪でなければ煮えなかつたのではないか」とも言う。幼い頃の記憶のため、あいまいなとこ

ろもあるようだ。また、屋外で寒い時に燃やして暖を採ることも用いられたという。「オラダヂが来たのは終戦後だから草屋根じゃないけども、イロリでやったがらな。イロリだからみなそやして（ナベをかけて炊飯、煮炊きなどをして）。」「（サルケを燃やしたことは）あるある。俺も記憶あるけど、サルケってこの辺田んぼさ、草どが何とがでもってこう、ヨシがなんがの草がこう積み重なって、田んぼつぐる前みんなこの辺はそういうヨシとが草の積み重なって、そういうのとねば田んぼでぎねがら、取って、干しておぐば乾ぐがら、してもうもども草だがら、火つけだら燃えるがらね。燃えるけども草燃やすだがら、煙出るよな。ウヂはほら、ムガシのこの辺の人はイロリだがら、どせ薪燃やしたついででがらって、いやもう黒くなってるがらね。サルケ燃やした人もあんだけど、サルケは煙で目悪くしてしまうもんな。」「カマドはべづにそのどぎ（学校へ入る前）はながった。むがしのウヂは、古いウヂ（オオヤケ）はあったけども、俺たちのウヂはイロリで煮炊きして、それがらストーブの時代になったがらな。」「サルケ燃やしたたて、あまり火力ないがらな。アレやぱりホントに煮炊きするどぎはマジでなげればだめだったんでねがな。だがらサルケ燃やしてるづのはあまりウヂのながじゃ煙たくてアレじゃないがら、おもでで寒いどぎに燃やしたづ、それあてもどせ捨てるしかないがらさ、乾いどころに燃やして、すとやしてしたらしいな。アレ、サルケをウヂのながで燃やすてば、煙だけ出で、よほど乾燥してればカリヨグ強いば煙出ないけども、普通で、よぐ乾燥しておがないと煙だけ出るしな。ま、防虫効果にはいいだろうけど、目が（笑）。」「見たことはあるけど、燃やしたのは、ウヂ（家の中）では燃やさねけど田んぼのほど、むがし燃やしたことはある。それはまだ学校へ入る前だな。うん。」

ι氏は、現在はサルケを使っていないが、ストーブで薪を焚いている。母屋では使用しないが、小屋での煮炊きや、昼間の採暖に利用している。灯油代を節約するためだという。「田んぼのつぐってねえどごがら貰って来た。あまりいい木じゃないけども、杉でもなんでもねえんだけども。田んぼがらこう、ハンノギていうがそういう木、自分の田んぼも隣の田んぼもあまり来てるがらさ、昨日話して、昨日でねえ去年これくらいに切って、今年の春にこまぐ切ってただヤヂのほうに積んでだの、少し腐ってるんだけど。それいまはごんでらの。ウヂのながはタギギ燃せないがら、こきストーブ置いて、小屋で煮炊きしたり、冬にヒルマ、油経済のために、昼間俺一人いま、シゴドしないがら、なづは暑いがらこでもすどごねんだけど、冬寒いどぎウヂで燃すより昼は、朝や夜は娘来るがらまさここだらアレだして夜は、朝ど夜はこちで、昼はふとりいるがら、こちでやって、ストブだがらサガナでも××（不明）でも焼いでく（食）にいいがらね。」

煙・臭気・灰 ι氏によると、よく乾燥したものでなければ、煙が出たという。煙は防虫効果にはよいが、目を悪くする原因になったと考えている。「あれ、サルケをウヂのながで燃やすてば、煙だけで、よほど乾燥してればカリヨグ強いば煙出ないけども、普通で、よぐ乾燥しておがないと煙だけ出るしな。ま、防虫効果にはいいだろうけど、目が（笑）。」「サルケ燃やした人もあんだけど、サルケは煙で目わるぐしてしまうもんな。」（2015年9月23日取材）

㊤ むつ市昭和町 κ氏 昭和17年生まれ 男性

κ氏は、土手内の住民ではないが、現在土手内の泥炭地を利用して菜園を営んでおり、幼少時にはサルケに触れた経験がある。

呼称・年代・目的・サイズ・用途・道具・その他

κ氏は田名部中心部で生まれた。昭和27～28年の頃、田名部郊外の矢立に住んでいた。矢立方面の沢には、サルケがあった。κ氏の父親は、サルケをレンガ大（厚さ10cm）に切り、薪ストーブの燃料としての活用を試みた。しかし、失敗に終わった。現在は昭和町に住み、土手内で菜園を営んでいる。「サルケってのわかるがなあ。ツヂのの、はあ、乾がせば火付いで燃えるようなの。ああいうの出てるんですよね。むごうの方（矢立方面）の沢は。（一般の人がそれを燃料に使用したということ）ないけどもね、ウチのオヤジはそれが興味あってさ、レンガくらいの大きさにね、このくらいの厚さ（10cmほど）、それをね、かわがして、火つけて燃やしてみたんだけど、やっぱり燃えないんだ。うん。燃えるったら、燃料にするつもりでいだったんだけど。やっぱり燃えない。いや、うちのオヤジがね、興味あって、ムガシのことだがらマジストーブだがら、けっきよぐそういうの燃えれば燃料になればいいがなっていうことで、自分も好きだし興味あるし、エのおやじはやってましたよ。」

κ氏はサラリーマンだったが、退職後、体を少しでも動かし、健康を維持するために、土手内地区の使われなくなった田を1500坪購入し、家庭菜園を営んでいる。「すごい土に栄養があるから、草はみるみるおがる」というように、現在、周囲の放棄された田には、柳をはじめとする先駆樹木が繁茂している。κ氏が購入した土地も、はじめは同様の状態だった。木を伐採し、根を掘り起こして畑にするのに苦労した。「ちょっと深く掘ると、大木が、木の根など昔のものが出てくる」という。このことは、土手内の住民の証言とも一致する。また、2年ほどは水はけが悪く、ドロドロの状態が続いたという。しかし逆に今は「日照り続きでも土地が湿潤なのでよく育つ。モノはほんとにいい」という。（2015年9月23日取材）

3. 整理と考察

(1) 呼称

金曲・大曲地区、土手内地区ともに、ほとんどの人が「サルケ」と呼んでいた。そのなかで、先祖が遠山里（つがる市木造）から入植したという事例（⑭大曲）で唯一、「サラケ」という発音が見られた。津軽地方における筆者の調査では、つがる市木造丸山、同土滝、同兼館で「サラケ」という発音が見られたが、遠山里は丸山に近く、また土滝、兼館集落も、岩木川下流域全体からみれば遠山里に近い地域である。先祖の出身地域での発音が、3代～4代後まで伝えられているということも考えられる。ちなみにこの話者は会話のなかで、「ハンデ」（だから）という津軽弁も使用していた。

「シギボ」（⑦大曲）「シグボ」（⑳土手内）という呼称も見られる。両者ともに、土壌のうち、表層に近いものを「シギボ」「シグボ」と呼び、その下の「サルケ」と区別する。「シキボ」（シクボ）は泥炭の呼称として、県内では主に南部地方で用いられる呼称である。下北地方のこれらの話者が、このふたつの呼称を用いて土壌を呼び分ける際に、泥炭の質的な区別しているのか、客土によって分解された（しつつある）泥炭を含めた「作土」と「泥炭」とを区別したものか、話者の説明だけでは理解できなかった。㉒の事例では、「サルケ」も「シクボ」も「泥炭」であるとの認識が示された。

ちなみに、『むつ市史 自然編』には、「下北地方では、泥炭のことをサルケ、泥炭地のことをヤチ、泥炭地水田のことをシクボ田と呼んでいる」との記述がある³²⁾。いっぽう、筆者の調査では泥炭地水田のことを「サルケ田」と呼ぶ例が複数確認された。

(2) 年代・普及

サルケがあまり使われなくなった時期について、金曲・大曲地区では次のような証言が得られた。昭和16-17年ころ（⑱大曲）、昭和10年代後半ころ（②金曲）、昭和19年ころには使用（③金曲）、昭和18-19年ころ（⑩大曲）、終戦後（①金曲）、昭和25年よりは前（⑰大曲）、昭和27-28年ころ（⑨大曲）、昭和20年代末ころ（⑦大曲）、昭和20年ころ（⑭大曲）、昭和31-32年ころにはあまり見られなくなった（⑫大曲）、昭和33年ころ（⑬大曲）、昭和33年ころ（⑮大曲）、昭和35年前後まで（⑥大曲）。これらのことから、金曲・大曲地区では、戦前から使用しなくなった家もあるが、遅くとも昭和30年代なかばまでには使用する家庭が減少していたと考えられる。

いっぽう、土手内地区では次のような証言を得た。昭和25年には多くの家で使わなくなっていた（㉑土手内）、昭和28-29年ころ（⑲土手内）、昭和30年代に入ると使用されなくなった（㉓土手内）昭和32年にはなかった（㉒土手内）、昭和33年には使用されていなかった（㉔土手内）、昭和34年ころには1軒（㉕土手内）という証言から、多くの家庭では昭和30年代前半を境に、使用しない方向に向かっていらしい。大曲地区よりも若干衰退が早い印象がある。土手内に嫁いだ人々の多数の証言がこれを裏付ける。逆に、以前はサルケを使用していなかったが、使い始めたという家庭もある。昭和29年以降薪ストーブで使用し始めた（㉖土手内）という土手内のθ氏である。サルケは煙が出るために炉で焚くことはしなかったが、煙道による煙の屋外への排出が可能な薪ストーブが入手できるようになり、使うようになったのだという。薪ストーブのない時代には薪を使い、薪ストーブ以後はサルケを使ったという点でユニークである。

(3) 性質や分布についての認識

A, 定義 サルケとは何かと尋ねると、「サルケとは草の根である」（⑥大曲）、「サルケはカヤの根である」（⑦大曲）、「植物の根が張っているものがサルケである」（⑮大曲）、「サルケとは、草の根が木の根とからまっているものである」（㉕土手内）、「サルケとは草などが積み重なっているものである」（㉓土手内）という答えが返ってきた。これらの証言から、サルケは植物の根の集積であると考えられている傾向があることがわかる。

B, 分布 サルケがどのように分布しているかについては、「大曲周辺は泥炭地帯である」（⑱大曲）、「サルケ田の下は、みなサルケがある」（⑧大曲）、「大曲から土手内の区間にサルケが分布している」（⑱大曲）というおおまかな認識もあれば、「向こうの山から600～700メートルにサルケが分布している」（②金曲）、「金曲では（泥炭層の厚みが）2尺程度だが、大曲では10尺程になる」（③金曲）、「道路を挟み、西は砂土で東はサルケである」、「ハッシュウ溜池（八忠溜池）付近の泥炭層が最も厚く、最大20メートルにもなる。住宅付近は砂土で、田の分布と泥炭の分布は

重なる」(⑭大曲)、「採れる場所と採れない場所がある。農免道路方面はよく採れる」(⑱大曲)というように、大曲地区の南部や東部にかけて泥炭層がより厚くなるという認識が示された。

C, 質的差異 前項で触れたが、一部の事例では、サルケを質によって呼び分けていたらしいことがわかった。「上側の土がシキボ、その下がサルケである」(⑦大曲)、「サルケの層の上側10cmほどがシクボ、その下がサルケで、両者は別のものである」(⑳土手内)という証言からは、サルケという呼称とは別に、あえてシクボという呼称(これも一般的には泥炭の呼称である)を併用していたことがわかる。つまり、泥炭の質によって両者を弁別していたと思われる。分解が進んだ泥炭と、下層の泥炭の別を経験的に区別して表現していたのではないだろうか。また、「表土は黒土で、地下60cm程度であれば土混じりのサルケ、100cmではサルケだけの層となり、200cm以上では砂層となる。深いほど良いサルケである」(⑲大曲)というように、呼称の別はなくとも深さによって質の違いがあることや、「良いサルケ」がどの程度の深さに分布しているかを認識している人もあった。

また、水平方向の質的差異については、「3線以北は質が悪い。呼び方の別はないが、サルケにもさまざまなものがあり、燃えるものもあれば燃えないものもある」(①金曲)、「4～5線以下が土のない泥炭が採れる」(③金曲)という証言があった。水路を目安として「よいサルケ」が採れる地域を認識していたことがわかる。

D, 質的評価 「燃えるものもあれば燃えないものもある」(①金曲)という証言からは、燃料として適しているか否か(燃えやすさ)という質的な面での評価が行われていたことが窺える。また「堅いもの(カダイノ)と柔らかいもの(ヤワイノ)がある。堅いものが形を保てるのでよい」(④金曲)という証言からは、固形燃料としての扱いやすさという面での評価があったこともわかる。筆者の津軽地方における調査では、堅いもののほうが、火力があり火持ちが良く、柔らかいものは着火が容易であったが火持ちが悪かったという証言が一般的であった。後者を「ボヤリ」「ボヤケサルケ」とも言った。しかし、燃焼温度の高低や燃焼時間の長短に対する評価は、使用者がどのような火を求めるかによって、つまり火の用途によって異なるのであり、また燃料以外の利用目的においても用途によって評価は異なる。用途が多様であれば、たとえば植物遺体の含有量(無機物の混入率)や炭化の度合いだけを以て一概に評価を下すことは難しく、また庶民の生活レベルにおける認識の実態を反映したものにはならない。産業利用を目的とした資源的評価(例『むつ市史』における「資源的価値は全くない」との記述)と地域住民の評価は、当然ながら別に考えなくてはならない。

(4) 入手

使用する人が自ら所有する田や土地から採取したという場合が大部分であった。「近隣の家の田に行き、貰ってきた」という事例はわずかに一件(⑨大曲)である。多くの家が農耕に従事していたことから、購入する必要がなかった。「売買や譲渡はなかった。自分のために採取した」(②金曲)、「余った分を譲渡したり売買することはなかった」(④大曲)という。しかし、副業的に販売をおこなった人もあったようで、「町(田名部)でサルケを売った人があった。小遣い程度の稼ぎになったと聞く」(⑦大曲)と話す人もいた。つまり、すべてが自家用というわけではなく、商品として流通し、町方ではサルケを買う人もいたようだ。

津軽地方では、専業としてサルケの販売をおこなう者もあったし、「質がよい」とされるサルケは一種のブランド品として他村へと流通していたが、下北地方やその周辺ではそれほどの需要がなかったようである。田名部平野の湿原は津軽地方に比べると比較的狭い範囲であることや、持山や村山がないといっても近くまで台地や海岸が迫り、柴を拾ったり、流木を手に入れたりすることも可能であったこと、山がちな近隣の村々(東通村など)との人の交流を通じて薪の入手が可能であったことなど、その背景の違いも要因のひとつとして考えられる。

「土手内では秋田から来た人がデータンの研究をしていた」(①金曲)という証言もあった。土手内での「秋田から来た人が炭窯を作って炭焼きをした」(⑳土手内)という証言とあわせて興味深い。秋田県内にも泥炭を本格的に利用していた地域がある。技術の交流があったのだろうか。

(5) 採掘

A, 目的 津軽地方では、燃料を得ることを第一の目的として語る人が多くを占めた。これとは対照的に、大曲・金曲・土手内地域(以下「3地域」とあらす)では、土地改良を第一の目的として語る人が多くを占めた。「データンが目的ではなく、田を低くするため」(①金曲)、「採って土を入れた副産物」(②金曲)、「田を低くするため、土壌の改良。サルケそのものは重要視しない」(③金曲)、「田に水がかからないから低くするため」(④大曲)、「田